

# 十三夜

石狩医師会  
はまなす医院

く どう けん ぞう  
工藤 謙三

十三夜は十五夜とともにお月見をするという。どちらか一方を欠かすと「片観月」といって縁起がよくないとされる。この秋、新聞のコラムに教わった。

旧暦で八月十五日の夜から一回りした次の満月が九月十三日の十三夜である。

それぞれ十五夜が芋観月、十三夜が豆観月（or栗観月）と呼ばれるともいう。

八月と九月の満月の夜、その時々には収穫される作物に感謝してそれを供えるということだろうが、私はてっきり十五夜のみが中秋の名月だと思っていた。

「十三夜」はお月見としてではなく、樋口一葉の小説の題名として長らく私の頭にあった。中学の教科書だったかと思うが肖像写真と一緒に載っていたタイトルを覚えている。一葉は24歳で早逝した明治の女流作家である。五千円札にも描かれている。しかしなぜか一万円の福沢諭吉、千円の野口英世と共に影が薄いような気がする。キャッシュレスが主流になったせいかもしれない。

ともあれ十三夜とはどんな小説なのか？ これを機に一念発起して読んでみることにした。

明治時代も初期の作品のことで読み進めながら古い仮名遣いと旧漢字が多いことに閉口した。句読点も極端に少ない。

参考までに冒頭を掲げてみよう。

.....  
例は威勢よき黒ぬりの車の、それ門に音が止まった娘ではないかと  
両親に出迎かはれつる物を、今宵は辻より飛びのり  
の車さへ帰して  
悄然と格子戸の外に立てば、.....

これを現代語にすれば「いつもなら、威勢のいい黒塗りの人力車の音が門の前に止まって、それ、娘が帰って来たのではないかと、と両親に出迎えられるところを、今晚に限っては、四つ辻で拾ってきた車も帰してしまつて悄然と家の格子戸の外に立たずんでいる」となる。

蛇足とは思ふが苦勞して読了したので、以下にストーリーを載せてみたい。

前述の冒頭の場合から話は次のように続く。

「格上の名家に嫁いだ娘のお関がバワハラに耐えかねて小さな子供を残して覚悟の里帰りをする。両親に離縁を願ひ出るのであるが、叶わず逆に説得されて

しまう。実家は婚家の世話になっているのだ。実弟もその縁で良い職を得ている。縁が切れれば金も断たれる。家族のために無理にもあきらめて帰つてゆくお関だったが、道すがらたまたま拾った人力車の車夫が昔なじみだった。もと大店の若旦那でお関へ思いを寄せていたのだ。それが叶わず身をもち崩して今は見る影もない。心に傷を持つ者同士、久しぶりの再会にもかかわらず、互いに顔を見られまいとする。空車を引く男と並んで歩くお関。そんな二人をおりからの十三夜の月が照らし出すのであった」

街灯もなかった時代、名月の十三夜は、わけありの二人にとって明るすぎたかもしれない。

今年（2022年）は9月10日、10月8日がそれぞれ十五夜と十三夜だった。いずれの夜も快晴でいい月だった。とくにその気になって見た十三夜の月の美しかったこと！といたいところだがそれはウソで、どんなに眺めても十五夜と変わりはない。

ただしこのとき、単に月見酒を飲むだけでは味気ない、ずっと頭にあった十三夜を読んでみようか、という気になった次第である。

それにつけても十三夜が名月であることを知らないままこの小説を読んでいたら、きっとサゲを理解できずに聴き終えた落語のようなものだったろう。

60余年ふところに温めてきた小説である。時宜を得ていたような気がする。

子供のころ十五夜にはおふくろがススキとホオズキを飾つてお団子を添えてくれた。空気が澄んで虫の声が響いていた。だが残念なことに十三夜には何もなかった。これまでずっと片観月だった。

縁起が悪かったかどうか知らないが、幾度もの十三夜を無為にしたことは確かである。何よりも月見酒とお団子が惜しまれる。